

出水薫・金丸裕志・八谷まち子・椋島洋美編著『先進社会の政治学—デモクラシーとガヴァナンスの地平—』

山田, 良介
久留米大学法学部非常勤講師

<https://doi.org/10.15017/16454>

出版情報：政治研究. 54, pp.177-178, 2007-03-31. 九州大学法学部政治研究室
バージョン：
権利関係：

出水薫・金丸裕志・八谷まち子・栴島洋美編著

『先進社会の政治学』

——デモクラシーとガヴァナンスの地平——

(法律文化社、二〇〇六年、xii+二四五頁)

本書は、「先進社会」の問題を広範な分野で独自の視点から長年研究してこられた藪野祐三教授の還暦を記念して、同氏から指導を受けた中堅・新進の政治研究者たちによって執筆・刊行された論文集である。各執筆者は、「藪野政治学」とも称される同教授のこれまでの研究をふまえ、「デモクラシー」または「ガヴァナンス」を分析する際の視点として共有しながら、各自の研究テーマで九〇年代以降激変する国際政治と国内政治の現状を分析し、今後の展望を示している。

本書は、「まえがき」と九つの論考からなる。まず、「まえがき」では、「藪野政治学」のこれまでの軌跡が手際よく整理・紹介されるとともに、本書の執筆目的や概要などが述べられている。

第一部では「デモクラシー」をキーワードとして国内政治に関する議論が展開されている。「分権改革とデモクラシー」(出水薫)は、「デモクラシー」における正統化の機能に着目し、現在の日本の地方自治体では「選択と協働」という方策

が不可欠となり、その実施のためには、以前よりも正統性が厳しく問われる状況になっていることを論じている。「社会の変化と政党システムの変容」(金丸裕志)は、政党システムについてのこれまでの議論展開を検討した結果、政党システムの変化における政党の「自律性」を重視すべきであり、この視点からの日本の政党政治に対する分析の必要性を強調している。「介護保険制度をめぐる政策過程の集権性」(原清一)

では、日本の介護保険制度の集権的な性質を明らかにするとともに、藪野教授が提示する「社会への分権」という視点から、同制度の意義について検討を加えている。「地方自治体の政策イニシアティブ」(ベアタ・ボロディチ)は、沖縄県の「国際都市形成構想」をめぐる一連の政治過程について「政策の窓モデル」を用いて検討を加えることにより、地方政府のイニシアティブによる政策が中央政府の決定アジェンダに設定されるための条件が提示されている。「まちづくりの資源と討議過程」(光本伸江)は、大分県の田湯布院町をとりあげ、「まちづくり」が成功した理由として、行政組織と民間組織が「討議過程」を通して協力した点を示すとともに、市町村合併問題といった「国策」の性格が強い政策領域においては、この「討議過程」が機能不全に陥ると指摘する。

第二部には「ガヴァナンス」をキーワードとした国際政治

に関する諸論考が収められている。まず、「J・ローズノウの『統治(ガヴァナンス)』の概念をめぐって」(案浦明子)では、ガヴァナンス論の代表的論者であるJ・ローズノウ(James N. Rosenau)の「国際政治と世界政治」や「政府(ガヴァメント)と統治(ガヴァナンス)」といった議論内容が簡潔に整理されるとともに、同氏の代表的な論文が翻訳・紹介されている。「地球環境ガヴァナンスの『空間』と『時間』」(渡邊智明)は、近年問題となっている地球環境問題に対する国際社会における取り組み状況について「時間」と「空間」という二つの観点から検討を加えるとともに、この問題については、国家だけではなく環境NGOといった多様なアクターの参加による秩序形成がなされていることなどから、ガヴァナンス論による接近の有効性を提示している。「EUの複合的ガヴァナンス」(八谷まち子)は、複雑なEUの組織構成と「コミットロジー」制度にみられるような独特の政策決定・実施過程のあり方について整理・検討するとともに、「超国家的[supranational]なEUを論じるにあたっては、新たな「ガヴァメント」(政府)としてではなく、「ガヴァナンス」として捉えることの妥当性を論じている。最後の「アジア太平洋地域の『新しい』リージョナリズム」(椛島洋美)は、ガヴァナンス論の観点からAPERCの活動に代表されるアジア太平

洋地域における国際関係を考察するとともに、その関係が超国家的な枠組みに移行しない点などを挙げて、EUのような従来のリージョナリズムとは異なる「オープン・リージョナリズム」としてこれを位置づけている。

本書は、研究論文集という性格を有しつつも、比較的平易な文体で丁寧に説明されているため、本格的に政治学を学ぼうとする大学生・大学院生を対象とするテキストとしても用いることができよう。権力論についての議論は控えられているが、むしろ権力をめぐる問題性が露骨にあらわれないことこそ「先進社会」における政治の特徴の一つなのかもしれないが、現在着目されねばならない諸テーマをあつかう本書は、これからの国際・国内政治の方向性を考える際に格好の題材を提供するものであるといえる。(山田良介)

木村朗著

『危機の時代の平和学』

(法律文化社、二〇〇六年、xiii+二九五十七頁)

本書は、著者の言葉を借りれば、「平和学への歩みを、これまでの研究の軌跡と重ね合わせる形でまとめたもの」(「はじめ